関西自然保護機構会報（13），1986.

KONCにおける指標生物の講演について[1)]

森　下　郁　子
（淡水生物研究所）

KONCで指標生物の講演を行ったのは2度目である。講演に先立つ1985年12月に，「指標生物学―生物モニタリングの考え方」（山海堂）を表わしていた，事務局に参加者の人数を問合せ，その分をテキストとして送った。

当日はその本を使って講演する予定であったが，会場に集っていらした面々を拝顔して蛇足になる恐れのある話は止めることにした。もともと指標生物は日本では故津田松苗先生が提唱されはぐくんで来られたものである。行政的に理解されたのは1955年の淀川の調査からで，今のモニタリングの基礎は1972―3年に環境庁からの要請によって簡易法を開発したものである。

それらの経緯についても著書の中にのべてあったので，当日の講演は西アフリカのニジェール河の話をスライドを使って行なった。

ニジェールについてはとくに，この項で記すことは不適当と考えるので割愛する。そうなると事務局からの依頼のあった原稿になるものがない。

指標生物についてではなく，生物指標ということで日頃考えていることを少し補足する。

何のための，生物指標なのかということがどうも誤解されているようである。

計測器で測れない，トータルな水環境を測っているはずなのに，その表現しようとしている環境についての認識が希薄なのである。手段であるはずのものが目的になり，目的の先にある思想がどうもないがしろになっているような気がする。

「川の健康診断」というたて書きの本を書いたとき，マスコミは面白がってくれたけど，一般の人が，こんな短い時間でこんなに沢山，参加したモニタリングが各地で行われるとは予想だにし得なかった。

手段として，応用として指標生物をつかったモニタリングが進展していくというのに，基本になる生物分類学の方はおせじにも発展してきたとは言い難い。

先搬来から，ジャンボタニシの名で，話題を呼んだラプラタリンゴガイは日本への上陸が早くから懸念された貝である。まだ上陸はしないが水道水に異臭味をつける淡水のイガイのグループもつい目の先の韓国まできている。

イトミミズにしても，ユスリカにしても，疑問が生じても答えがない。

一般の人の生物に対する関心が増えた割には専門の研究者の数が増加する傾向にはない。もう少し研究者を増やすため手だてはないものだろうか。

なお「指標生物学―生物モニタリングの考え方」はまた残部がありますので，もし目を通してやろうという方がおいでしたら，淡水生物研究所まで返信用封筒を入れて申込んで下さい。A5版 p.159です。

1）関西自然保護機構業績第39号